躍

季刊［やく］
2010 Winter｜第7号
関西電力株式会社

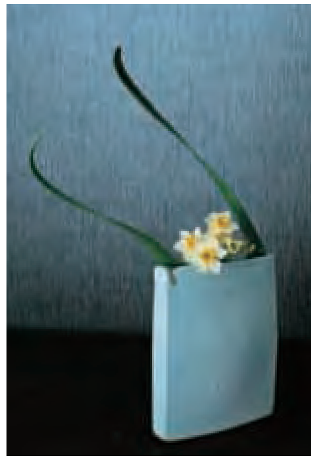
特集●［鼎談］基軸を探る

国際社会の潮流が変わるなか、日本はどう動けばいいか

伊藤元重／山家公雄／村田晃嗣

躍
季刊［やく］ 2010 Winter｜Number 7
関西電力株式会社

関西電力



表紙

「春待つ風をはらむかのような葉先、気品が香り立つ、日本水仙」

身にしむような寒さのなかで、すっと伸びた葉と凛とした白い花。
雪中花（せっちゅうか）の別名を持つ水仙は、
花の少ない季節をすがすがしく彩ってくれる。
清楚な香りとともに、葉の表情も魅力的で、
その葉先を「風先」と呼び、風の吹き行く方向を示すとか。
しなやかな葉の流れに、新しい季節の風をイメージして、いけた。

花／日本水仙
器／李朝白磁角瓶
所収／平凡社刊『別冊太陽　川瀬敏郎 四季の花手帖2』
撮影／宮下直樹

花人　川瀬敏郎　かわせ としろう

一九四八年京都府生まれ。幼少より池坊の花を学び、日本大学芸術学部を卒業後、パリ大学へ留学。演劇、映画を研究する。帰国後は流派に属さず、いけばなの原型「たてはな」と、千利休が大成した自由な花「なげいれ」をもとに、花によって「日本の肖像」を描くという独自の創作活動を続ける。二〇〇九年「京都府文化功労賞」受賞。

03
特集①［鼎談］基軸を探る
国際社会の潮流が変わるなか、
日本はどう動けばいいか
伊藤元重／山家公雄／村田晃嗣

19
Visitor's さんか［滋賀編］
「琵琶湖から祖国へ、循環思想を伝えたい」馬 樹茂

21
特集②［ルポ］MOVE ザ関西
アジアに向く関西

36
街の灯り物語
「戻ってきた灯りに感じた人の温かさ」SAKURA

39
クリッピングファイル
「IAEAの役割と原子力平和利用国家・日本への期待」天野之弥

43
エコルーツ紀行
大正モダンの電源開発、木曽川水系を行く　黒崎 緑

躍

季刊［やく］
2010 Winter｜第7号
関西電力株式会社

鼎談

国際社会の潮流が変わるなか、日本はどう動けばいいか

百年に一度と評された世界的な経済危機からの回復は未だ見えないなか、世界の潮流が変わりつつある。既に不況の底を打ったと見られる大国・中国が二〇一〇年にはGDPで日本を抜き世界第二位の経済大国になると言われ、国際社会の枠組みはG8からG20へと大きく舵を切ったかに見える。日本ではCO_2削減二五%への対応が急がれるなか、世界全体で景気回復を図りつつ低炭素社会へのシナリオをどう描くか――日本の進路と課題を考えたい。

伊藤元重
東京大学大学院経済学研究科教授

山家公雄
エネルギー戦略研究所 取締役研究所長

村田晃嗣
同志社大学法学部教授

国際社会と日本の今をどう見ているか？

日本の地位が後退するなか 変化への対応が問われる二〇一〇年

伊藤　きょうは、グローバル化のなかでの日本の進路を考えたいと思います。まず国際社会と日本の現状について、村田さんはどう見ていますか。

村田　私は国際政治を専門にしており、日本国内では二〇〇九年に政権交代という変化が起きましたが、国際的にも変化が起きていて、内政と外交、両方で大きな変化が進んでいる。とりわけ二〇一〇年、国内では七月に参議院選挙があり、十一月にはアメリカでも中間選挙。この結果によって、日米双方の今後の政策が規定されてくる。さらに二〇一〇年は日米同盟の五十年。十一月の横浜APECでオバマ氏が再来日する際、沖縄の基地問題やアフガニスタンの復興支援問題などがどうなっているか。今後の日米関係にとっても節目の年だと思います。

一方、アジアでは、一九一〇年の日韓併合の百年目にあたるわけで、韓国はじめ近隣諸国との歴史問題を、今後どう解決していくかが改めて問われる時期に来ている。

そして五月、NPT、核拡散防止条約の再検討会議が開かれるので、オバマ大統領が提唱している「核兵器のない世界」の実現に向けて、世界が一歩前進できるのか、日本がどういう協力ができるかが問われる年にもなる。

経済的には、各種統計で日本のGDPは中国に抜かれることは明らかですから、日本の地位後退もかなり深刻な問題として出てくる。そうしたなかで、日本が総合的な外交戦略を練って、変化に対応していけるかどうか、内政をどれだけ安定させられるか。この一年は、日本にとって随分重要な年になるのではないかと思います。

伊藤　二〇一〇年はいろいろな面で節目の年のようですが、その変化の背景、理由は何かあるんですか。

村田　一つには、冷戦終結――八九年十一月九日のベルリンの壁の崩壊を一つの節目と考えれば、あれから二十年たったわけですね。国際システムの変化は一一・九に起き、二〇〇一年の九・一一で、今度はアメリカの外交政策が単独主義的になった。そういう変化に、第二次世界大戦後の国際秩序が対応し切れなくなり、制度や力関係の大きな見直しが迫られるようになってきています。

新興国の著しい経済成長により 資源制約と環境制約はますます強まる

伊藤　山家さんは、特にどこに注目されていますか。

山家　エネルギーや環境の視点から言えば、やはりここ数年、資源制約と環境制約が非常に強く意識されてきました。特に中国をはじめBRICsの経済成長が著しいこともあって、資源需給が逼迫して制約が強まっている。ただ、もう一つ、CO_2削減という環境制約が圧倒的な存在感を持ってきた。二〇五〇年までに世界でCO_2排出を半減するため、先進国は六~八割削減しなければならず、その中間地点である二〇二〇年に日本は二五%を削減。これは実現可能なのか。この環境制約をどう乗り切るかが、最大の焦点だと認識しています。

伊藤　資源制約ということでは、一九七〇年代に二回、石油ショックがありましたよね。今回も石油価格が高騰したが、当時の方が緊張感もあり大変だったのではないか。今の資源制約は、世界史上、大きなイシューですか？

山家　それは大きなイシューですね。

伊藤　では、なぜ今、そういう大きな問題が？

山家　やはり人口増とか、BRICsなどの経済成長が引き続き高まっていくということですね。

IEA（国際エネルギー機関）の見通しでも、二〇五〇年、世界のCO_2は、このままでは二・一倍になり、大半がOECD以外です。ということは長期的に化石燃料などの資源は逼迫する。現に、原油は最近また高騰していて、高めで推移することは覚悟しなければいけなくなっている。

伊藤　ただ、環境制約が強まると、逆に資源制約はあまり重要でなくなる気もします。つまり、環境で成果を上げられれば、化石燃料を燃やさなくてもいいのでは？

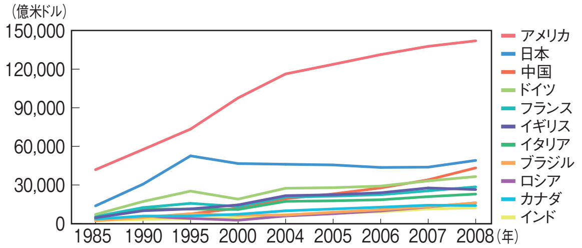
山家　確かに環境制約で化石燃料は使いにくくなっているが、やはり資源自体、埋蔵量はあっても、比較的楽に掘り出せるものが減ってきた。商業ベースで毎年安定して掘り出すことの難しさもかなり意識されてきています。

伊藤　すると、環境制約の問題に真剣に対応しても、依然として資源の問題は残るということですね。

経済成長著しい中国。2008年の北京オリンピック

NPT再検討会議
核拡散防止条約（NPT）運用検討会議。五年に一度開催。〇五年の会議では核軍縮に対するアメリカの消極姿勢などから決裂。

主要国のGDP推移



＊内閣府と外務省の資料をもとに作成

技術が牽引するグローバル経済化のなかで
世界の中心が新興国に移ったとき何が起きるか

伊藤　経済について言えば、金融危機からの世界景気の回復はそう簡単ではない。やはり百年に一度という危機が起きたわけで、これを金融だけの要因で説明するのは難しく、百年に一度の構造変化が起きている。

　私が注目しているのは二つあって、一つは、先進国が一斉に高齢化しているんですね。ですから資源配分で、今後、先進国から新興国にグーッと移らなければいけない。世界の中心が新興国に移ったとき、それが内外でどういう意味を持つかを考えていかなければいけない。

　もう一つ、今回の金融危機を起こした構造要因は、やはりテクノロジーだと思うんです。インパクトの大きい技術が出てくるときは、大体バブルになって、クラッシュするケースが多い。一九二九年のウォール街の株の大暴落の前は、いわゆる自動車バブルが起きた。

　今回は、すべての情報が数値に換えられた。音声や映像だけでなく、遺伝子も数値に換えられる。このデジタルテクノロジーの進化が一番わかりやすい形で現れたのが、グローバル経済化です。つまり、インドでも中国でも簡単に最先端技術にアクセスでき、世界中にものやサービスを提供できるようになった。今度、これが行き過ぎて、二〇〇〇年からの八年間で、世界の一人あたり所得の成長率は史上最高を記録した。世界経済のグローバル化を推進する技術革新が今後も進むことを考えると、これも今後の経済を考える上で非常に重要です。

伊藤 元重　いとう もとしげ
東京大学大学院経済学研究科教授;
総合研究開発機構理事長(国際経済学)
1951年静岡県生まれ。東京大学経済学部卒、東京大学大学院、米国ロチェスター大学大学院経済研究科博士課程修了。Ph.D. ヒューストン大学などを経て、82年東京大学助教授、93年教授。06年総合研究開発機構(NIRA)理事長。政府審議会委員など歴任。編著書『経済危機は世界に何をもたらしたか』『危機を超えて―すべてがわかる「世界大不況」講義』『リーディングス・格差を考える』『大変化』など。テレビ東京「ワールドビジネスサテライト」など出演。
http://www.nira.or.jp/president/index.html

山家　今、欧米では景気の二番底という議論が出ていますね。ケインズ的な金融政策や財政政策でカンフルを打って、何とか来ているが、よくよく統計を見ると、金融機関で巨大な不良債権があり、下手したら、かなり長い間、欧米は停滞するのではないか。一方で、デカップリング――世界経済とは切り離して、途上国が伸びていくという議論がある。リーマンショック後、途上国も一時低迷し、デカップリングは幻想だという話もあったが、ここに来てBRICsを中心にまた伸びており、結構デカップリング的な面があるように思います。

伊藤　二番底については、どれくらいのタイムスパンで考えるか、ですね。現状では経済対策のカンフル剤の効き目が減ってくる二〇一〇年一―三月期か四―六月期が厳しいと言われるが、それが二番底か回復途中の踊り場かは、見方が分かれる。ただ、目を三～四年後に転じたとき、回復とまではいかなくても、三年も四年もどん底に陥っていると言う人はほとんどいない。潤沢な投資資金があるし、技術革新も激しいから、新興国が前に出て世界経済を牽引していく。だから私自身は三～四年のスパンでは多少楽観的に見ています。

　それから、くせ者はアメリカだと思うんです。アメリカには世界中の優秀な若い人たちがやって来て定着するので、人口が年間三百万人増加し、今、三億人の人口が二〇五〇年には四億二千万人になる。その点で見るとアメリカは非常に面白い存在で、例えばITでも食糧でも、化学、医薬品でも、アメリカは技術革新を常に引っ張っている。だからアメリカがどういう形で復活するかに注目しています。

一人あたりGDPはまだ日本の十分の一
中国の成長は今後も続く

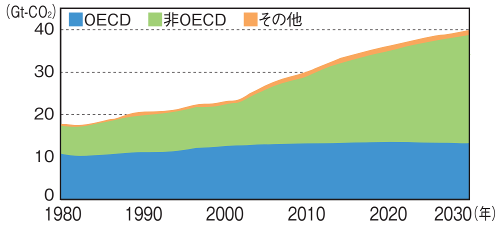
村田　私はむしろ中国が気になります。中国は間もなく労働人口が急速に高齢化する。エネルギー効率も、中国は日本の八分の一だそうで、資源制約と環境制約はまさに中国が鍵を握っている。今回の金融危機で中国は予想以上に早い段階で公的資金を大きく投入して七％成長を維持しているが、この成長はしばらく続くのかどうか。

伊藤　中国にとって最大の経済的リスクは、環境制約と人口の問題。それを加味しても、中国はかなりのペースで成長するだろうと、多くの経済学者は見ています。

　理由は、一つは「コンバージェンス」。途上国は条件が整えば速いスピードで成長できる。日本のように成熟すると、なかなか成長できないが、中国は所詮一人あたりGDPはまだ日本の十分の一ですからね。二つ目は、中国は経済構造がこの五年ほどで輸出型から内需型に急速にシフトしつつある。ものすごくインフラ整備をしているが、成長が激しいから、それだけ公共事業をしても、中国政府の借金はGDPの二割程度。だから現段階では、これから十年、中国が急速に失速することは考えがたい。

山家　ただ、この調子で伸びていくと、資源制約が出てくるのは間違いない。中国が最近、環境にも比較的やる

世界のCO_2排出見通し



*IEAの資料をもとに作成

デカップリング
非連動、切り離し。アメリカ経済が低迷しても、中国、インドなどの新興国が高成長を維持しながら世界経済を牽引するという考え方。

気を見せているのは、資源制約と密接に絡んでいるし、あまりにも環境が悪く、公害問題からも資源の使い方を見直さざるを得ない。

資源調達で日本は中国に買い負けるという議論があるが、既に日本はLNGや石炭を長期契約している。中国やインドは国家戦略で買い漁っているとはいえ、ゼロから新しく契約を積み上げるのは実は大変難しい。省エネをしないと、そもそも安定調達もできない。だから中国の場合、環境と資源制約が密接にリンクしています。

伊藤　国内でものすごく成長パワーがあるのに調達で苦労していると、国際紛争につながらないか。かつて第二次世界大戦も資源争奪から始まったわけですが。

村田　国際的な相互依存を考えると、ある程度の経済規模と国際的ステータスを持っている国の間で、資源をめぐって武力行使が行われる可能性は少ない。戦争の心理的代替機能として経済や歴史解釈など非軍事分野でバーチャルな戦いは増えるかもしれないが、アクチュアルな戦いは相当ヘッジされていると思います。

二〇一〇年代の世界をどう展望するか?

G20へ、世界が多極化するなかで グローバルとローカルのせめぎあいが起きる

伊藤　では、二〇一〇年代の世界をどう展望するか。これから十年、何が大きなトレンドになるでしょうか。

村田　途上国の台頭と先進国の後退の話が出ましたが、国際政治で見ても、十九世紀はマルチポーラー（多極）の世界で、二十世紀半ばから米ソ二極になり、冷戦終結後はアメリカの単極。そして今度はテロとの戦いということで、ノンポーラー（無極）になるという見方もある。

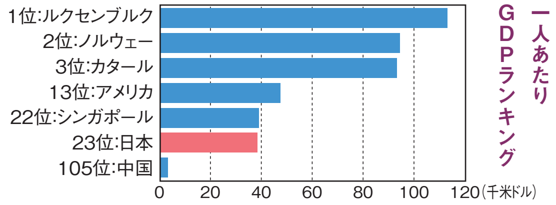
ノンポーラーかどうかはわからないが、趨勢としては再び多極に向かいつつあるかもしれない。昨年、G20に機能が移ったことは、大変象徴的な出来事でした。かつてはG7だけで世界のGDPの七~八割あったが、今や半分で、G20でようやく八割。G7の枠組みではやっていけず、もっと大きな枠組みに変わりつつある。

ところが、数が増えたときのゲームのルールや意思決定メカニズムがまだまだ調整できていない。G7の場合は基本的に価値共有ができていたが、G20は経済はともかく政治・文化の価値が異なりますから、G20がG7と同じ程度に機能するかどうかは、相当熟練や調整を要するだろう。今は蛇行的で過渡的な状況ですね。

日本にとって苦しいのは、二〇〇六年に国連の安保理改革に失敗して政治分野で我々のプレゼンスを増やすことはできず、G20になったことで経済分野でもプレゼンスが相対的に低下。だから余計、知恵と総合力を活用した外交をやらないといけないときに来ています。

伊藤　大きな枠組みでは、そういう方向かと思いますが、他方で気になっているのは、グローバル・イシューのかなりの部分が、ローカル・イシューに置き換わってきている。つまり、WTOなどで経済自由化を議論すると調整が難航するが、NAFTAやEU、あるいはアジアで

一人あたりGDPランキング



*IMF「World Economic Outlook」(2009.10)の資料をもとに作成

なお、その他の主要国の順位は、16フランス、18カナダ、19ドイツ、20イギリス、21イタリア、53ロシア、64ブラジル、144インドなど。

G20
アメリカ、日本、イギリス、フランス、イタリア、ドイツ、カナダのG7に加え、ブラジル、ロシア、インド、中国のBRICs、オーストラリア、メキシコ、アルゼンチン、韓国、インドネシア、サウジアラビア、トルコ、南アフリカ、EU。

グローバルリーダーとしての再生が注目されるアメリカ（ホワイトハウス）

も域内の自由貿易協定などは進みやすい。グローバルに合意が必要だけれども、その過程でローカルというか、リージョンが出てくる。問題が複雑になってくると、グローバルでエイヤ！と解決するのは難しい気がします。

村田　環境もエネルギーも核の問題も、総論の部分ではグローバルに議論ができる。例えば、「核兵器のない世界」もグローバルな課題ですが、ある段階まで来ると、じゃあイランはどうなる、北朝鮮はどうなる、それに対して近隣諸国はどう対応していくかという、ミクロの視点も重ね合わせないと具体的に進まない。

電気の流れにも変化が？

山家　国際社会が節目を迎えているのと同様、エネルギーも今、百年に一度の節目にあるのではないか。二十世紀最大の発明が電気で、電気が文明や産業を支えてきたが、この供給システムに新たな発想が必要になっている。

今は大規模発電で交流の電気をつくり、交流の流通で段階的に電圧を下げながら一方通行で送っています。低炭素社会を実現するには、安定して電気を供給することに加え、できるだけCO_2を出さない形で発電しなければいけない。その大きな役割を担うのはもちろん原子力ですが、自然エネルギーも今後増えてきます。また、消費者の低炭素実現に向けた役割が大きくなります。例えば消費者が自宅に太陽光パネルをつけたり、電気自動車が普及すれば、自ら電気をつくって貯める時代にもなる。

ただ、太陽光とかバッテリーは直流で、これが交流の世界に入ってくる。末端で発生する電気が多くなると双方向になります。自然エネルギーは不安定電源です。こうした状況下では、制御が大変で、下手をすると停電が起きる。低炭素をぎりぎりまで突き詰めると、そうなってしまう。それをうまく制御して、調和のとれたシステムをつくらないといけない。それが「スマートグリッド」議論の本質だと理解しています。スマートグリッドという言葉は世界に流布しているが、アメリカもEUも途上国も、それぞれの特徴に応じて視点が少し違うし、日本版スマートグリッドもアメリカとは必ずしも一致しないと言われているように、きちんとした定義づけは難しい。

低炭素時代は基本的にエネルギーは電気にシフトしていく時代になるのは間違いないはず。それを狙って、アメリカがグリーンニューディールとセットで打ち出した。いち早くこのシステムを確立すれば、世界に輸出できる。その意味で、アメリカはあなどれない。環境対策を超えた、すごい国家戦略がそこにある。

伊藤　それがグローバルなビジネス戦略に結びついているのはわかりますが、低炭素社会を踏まえた世界経済の持続的発展の可能性を考えると、スマートグリッドと太陽光発電だけで全部解決できるとは思えない。

山家　太陽光と電線だけではないんです。例えばアメリカの自動車産業再生はスマートグリッド構築の可否にかかっている。

伊藤　電気自動車？

山家　ええ。それにITにとっても膨大な需要になるし、

WTO
(World Trade Organization)
世界貿易機関。各国が自由にモノ・サービスなどの貿易ができるようにするためのルール（＝各種の協定）を決め、貿易障壁を削減・撤廃するために、加盟国間の貿易交渉の場を提供する国際機関。九五年成立。現在百五十三カ国・地域が加盟。

NAFTA
(North American Free Trade Agreement)
アメリカ、カナダ、メキシコ間で結ばれた「北米自由貿易協定」。

スマートグリッド
対象となる地域や目的により、さまざまな概念を持つが、概ね「従来からの集中電源と送電系統との一体運用に加え、情報通信技術の活用により、太陽光発電等の分散型電源や需要家の情報を統合・活用して、高効率、高品質、高信頼度の電力供給システムの実現を目指すもの」を指すと考えられる。（低炭素電力供給システムに関する研究会報告書から）

パワーエレクトロニクスだけでなく家電製品の標準化にもつながり、そこを握るとアメリカの製造業が復活するかもしれないわけで、結構大きな話だと思います。

アメリカに代わるリーダーは当面見あたらず再生に期待せざるを得ない

村田　今の話を政治的に考えると、かつてアメリカの建国以来最大の危機は南北戦争だったわけです。それまでアメリカは単なる州の連合体、一つの国という認識はなかった。それが南北分裂の危機を回避して、アメリカは一つの国だというナショナルアイデンティティを確立、急速に工業発展を遂げた。またアメリカが震源地になった一九二九年の世界大恐慌では修正資本主義を取り入れて資本主義をバージョンアップ、第二次世界大戦後にソ連の計画経済と対峙した。今般、グリーンニューディールで一回り大きなナショナルアイデンティティを再確立すれば、アメリカが再び力強く甦る可能性は十分ある。

もう一つ、今後の世界を誰がリードしていくかというときに、中国がアメリカに取って代わるとか、G2・米中の枠組みや、もっとマルチのG20とか、いろいろな可能性がある。しかし中国の経済成長が続くにしても、中国が国際公共財を提供してリーダーとして行動するかは疑問ですし、G20のようなマルチだと非常にコストがかかる。当面アメリカのリーダーシップに依存せざるを得ない以上、アメリカの再生には期待したいところです。

伊藤　よくドルの暴落なんて言われるが、で

山家 公雄　やまか きみお
エネルギー戦略研究所 取締役研究所長
（エネルギー／環境／電気事業）
1956年山形県生まれ。東京大学経済学部卒。日本開発銀行（現・日本政策投資銀行）入行。エネルギー部電力室課長、環境・エネルギー部課長、ロサンゼルス事務所首席駐在員などを経て、05年地域総合整備財団出向、07年日本政策投資銀行調査部審議役、09年7月より現職。著書『オバマのグリーンニューディール』『日本型バイオエタノール革命』『ソーラー・ウォーズ』『エネルギー・オセロゲーム』など。
http://www.kepco.co.jp/insight/content/column/column053.html

はユーロがドルに代われるかというと、今、ヨーロッパはむしろ弱体化。中国は所詮GDPはまだ世界の一割だから、中国通貨がドルに代わるなんて当分考えられない。新興国はそれぞれ思惑が違うので一つになるのは難しい。となると二〇一〇年代はあまり変わらない気もします。

村田　十年後、アメリカはポストオバマの時代。その時アメリカがどうなっているかは、オバマの八年間がどの程度成功しているかだと思うんです。オバマ政権下でブッシュ時代のアメリカに対する国際的な反発は相当リカバーしたが、気になるのは内政で、支持率が五〇％を切った今、アメリカの国際的リーダーシップの回復が、国内政治の対立で難しくなる可能性がある。

地域資源としての太陽光や風力を使いつつ基幹インフラは従来型で両立させる

伊藤　山家さん、二〇一〇年代、世界全体の低炭素社会への体制づくりは本当に可能ですか。

山家　二〇二〇年は、CO_2削減では中期目標の設定年。ここに向け、世界でスマートグリッドにどう対峙し、どう進めていくかでしょうね。例えば、ここ一〜二年、EUは、環境もそうですが、むしろエネルギーセキュリティにものすごく関心が移っている。ロシアからの天然ガス供給が止まるかもしれない問題が毎年のように目の前に突きつけられる。そのなかで再生可能エネルギーは効率は悪いが、確実に地域の中にある。エネルギーセキュリティ上、地域資源をきちんと使う視点は大事です。ただ、それにはグリッド、送電がしっかりしていないといけない。EUは国と国との連結点が弱く、北に風力、地中海に太陽エネルギー、真ん中にはバイオマスがあるが、分断されている。それをつなぐことでエネルギーセキュリティを確保する。それがEUのスマートグリッドです。

伊藤　CO_2排出大国の中国など新興国はどうですか。

山家　ある意味、新興国こそスマートグリッドの良さが発揮できるのかもしれない。日本とか先進国は既にインフラが整っているが、新興国は電線などがまだ未整備。そのとき、わざわざ膨大な送電線を張らなくても、一番手っ取り早いのは、そこにある風力、太陽光、バイオマスを使って発電し、バッテリーだけを整備するようなイメージ。これは先進国では二重投資で、非常に効率が悪いが、途上国はまっさらだから自由に絵を描ける。

伊藤　だけど、そもそも新興国は温暖化対策には不熱心。

山家　確かに技術力に乏しい新興国は、現実問題として使いやすい化石燃料に頼らざるを得ない面がある。

その際、日本の火力発電の効率は世界最高で、徐々に効率を上げていく技術はすごい。アメリカの電力は半分石炭なので、それを日本の一番効率の高い発電所に全部置き換えれば、CO_2はかなり減る。ところが彼らには、じわじわという発想がない。一気にCCS（CO_2回収・貯留）とか、何か飛ぶんです。既存のものをベースに少しずつ効率を上げていく日本的な技術やノウハウは、アメリカよりアジアの方が受け入れやすいのではないか。

一方で、太陽光や風力などローカルで使えるものがあるわけだから、それはそれでやっていく。

伊藤　両面作戦ということですね。

山家　ええ。スマートグリッドにはいろいろあり、世界的にはローカルで完結するグリッドはやはり出てくる。しかし、従来の電力系統を阻害しないよう相互に連結し、基幹インフラは従来型で、両立していくのではないかと思います。

日本はどう動けばいいか?

核のない世界へ原子力平和利用の経験を生かす戦略が必要だ

伊藤　さて、そういうなかで、これから国際社会で日本はどう動けばいいですか？

村田　アメリカと同様、日本も七月の選挙次第で、二〇二〇年に向かう十年は民主党の時代かもしれない。すると民主党の政治が今後どれだけ成熟し、どれだけビジョンと柔軟性を持った外交を展開できるかが重要になる。

その点で私が感じるのは、民主党政権は、地球温暖化問題などグローバルな話には非常に感度がいい。ところが、インド洋での海上自衛隊の給油問題など、グローバルでなくローカル、二国間の問題などでは、自民党との違いを出したいという力学も働いているのでは。グローバル課題と二国間課題のリンケージをしっかりさせないと、これから十年、日本外交が影響力を行使するのは難しい。

アメリカや中国、東南アジア、日本など、アジア太平洋経済協力を進める「APEC」

CCS
(Carbon dioxide Capture and Storage)
CO_2回収・貯留。発電所や工場から出るCO_2を回収し、地中や海洋に貯留する技術。

伊藤　どうしたらいいんでしょうか？

村田　一つは当然、経験を積むことですが、他方で、できることとできないことの精査をしないといけない。

例えばオバマ大統領が提唱する「核兵器のない世界」は、日本が唯一の被爆国として戦後六十年ずっと言い続けてきたこと。日本外交はしばしば対米追随と言われるが、これについては、むしろアメリカが日本の主張に近づきつつある。だから千載一遇のチャンスなんです。

では、核を持たない国が、核のない世界の実現に向けて、一体何ができるのか。抽象的に核廃絶を訴えたり、平和を願う心を唱えたり、国際会議をホストするだけでは、十分なリーダーシップは発揮できない。もう少しブレークダウンして考えたとき、核のない世界の実現に必要なことは、核の拡散を阻止することと、原子力の平和利用を安定的なものにする。この二つがある。

日本に比較優位があるのは、明らかに原子力の平和利用です。この分野で、日本は経験と蓄積と技術を持っている。それを国際的にどう生かしていくかを、もっと戦略的に考えないといけないと思います。

目標達成よりプロセスが大事なアジア共同体

伊藤　その意味で、非常に関心を持っているのは、東アジア共同体です。アジア通貨危機以降、アジアは自ら問題に取り組もうとしていて、例えばアジア全域のＦＴＡにしても、十年ほど前に日中韓でやろうといって、民間の動きで終わっていたが、今度、産官学で始まる可能性がある。教育でも、アジア版エラスムス計画みたいな形で、アジアで二つ以上の国で一年以上教育を受けることで、アジア人を育てる動きが始まった。航空も、アジア・オープンスカイ――二〇一〇年、ＡＳＥＡＮがワンスカイになる方向で動いている。東アジア共同体をつくろうとすると大変な作業になってしまうが、地についた政策をやれば、結構成果が出てくるものがあると思います。

村田　賛成です。東アジア共同体というのは非常に抽象度の高い話、高邁な目標ですから実現できないという批判は多いが、この種の問題は、目標が達成されるかどうかよりも、プロセスが大事です。高邁な目標に向かうプロセスで、機能別、地域別に信頼醸成ができてくる。

例えば防災や医療・保健面での共同体。共産主義でも資本主義でも、地震や津波はやってきます。鳥インフルエンザなど伝染性の疾患も国境を超えて広がる。こういうものに対し、地理的に近接した国々が協力して対策をとることは大変重要で、私はやるべきだと思うんです。

大事なことは、東アジア共同体という概念と対等で緊密な日米関係をどうブリッジして相互にプラス効果を持たせるかという統合性と、共同体としてどの分野で具体的に協力していくかというプラクティカルな戦略を練ること。その二つが今後の外交課題になると思います。

伊藤　環境における東アジアの連携などはどうですか。

山家　例えば火力発電と原子力での協力。特に原子力は今後アジアで大きな割合を占めていくはずなので、平和利用先進国としてアドバイスできることは多い。

また民生用の省エネの切り札として期待されているヒートポンプは、実は高温多湿地域で特に効力を発揮する。東南アジアに日本のヒートポンプ空調が適用されれば、かなりCO_2削減になる。ところがヒートポンプの弱点は、まだ初期投資が高い。だから製造コストが安いアジアでどんどんつくって初期投資を下げれば、一気に普及する。それは日本にもいい影響を与えます。

伊藤　新興国との関係で、単に排出権を買うだけでなく、むしろ技術で支援する形にすれば、それは回り回って、日本にもプラスで返ってくるわけですね。

百年に一度の人材危機、経済だけでなく複合的価値観を持つ人材育成を

伊藤　国内に目を転じ、日本の国情を踏まえた現実的で実効ある低炭素社会をつくるには、何が鍵になりますか。

山家　テクノロジーと、もう一つは日本的価値観。日本市場はだんだん狭くなるので、市場を世界に求めていく視点での技術開発が大きな柱です。ただ、どんなに頑張っても技術に限界があるとなったとき、やはり生き方やライフスタイルの話になる。足るを知るとか自然との共存という日本的価値観を、うまく世界に発信できないか。

伊藤　世界に発信する前に、それが日本にできますか。

山家　私、実は今、長野に住んでいて、結構低所得で暮らせます。家が余っているから格安で貸してくれる。人も集まってきているし、田舎に住むこと自体、水資源や森林・耕地維持などの観点からも価値がある。それは、

村田 晃嗣　むらた こうじ
同志社大学法学部教授
（外交史・安全保障政策）
1964年神戸市生まれ。同志社大学法学部卒、神戸大学大学院法学研究科博士課程修了。米国ジョージ・ワシントン大学留学。広島大学助教授を経て、2000年同志社大学助教授、05年教授。日米関係と東アジアの安全保障など研究。著書『プレイバック1980年代』『アメリカ外交』『米国初代国防長官フォレスタル』『大統領の挫折』、共著『オバマ大統領』など。YTV「たかじんのそこまで言って委員会」など出演。
http://www.kojimurata.jp/

東アジア共同体
東アジアにおいて構想されている地域共同体。九〇年代初頭にマレーシアのマハティール首相が提唱した「東アジア経済グループ」構想に端を発し、〇二年のＡＳＥＡＮ首脳会議時に当時の小泉首相が共同体構築を呼びかけたほか、〇九年の民主党政権でも共同体構想を打ち出すなど、国により論者により多様な定義がなされている。

アジア版エラスムス計画
ＥＵが八七年に開始した加盟国間の大学間交流協定等による共同教育プログラムにならい、アジア・太平洋地域で単位互換制度を中心に大学生や教員の留学・交流を進めようとする計画。〇八年に日本政府が打ち出した。

アジア・オープンスカイ
アジアの航空自由化構想。二国間路線への自由参入や航空運賃自由化などの手段を用い、日中オープンスカイをはじめ、日韓、日印、日アセアンなどのアジア諸国との間での自由化を実現しようという構想。〇六年以降進められている。

新規雇用や格差是正にもつながる。

伊藤　それは日本の国土構造を変えることですよね。みんな都会に集まるのでなく少し散らばる。だけど、その状況をどうやってつくるのか。現実問題、都会にどんどん人が集まっているし、CO_2排出量は増えています。

村田　その意味では、九〇年基準二五%削減は、問題提起として良かった。大胆な提案があること自体、大事だと思うんです。初めから現実に固執して、可能な範囲でだけ議論していると、人間の発想は変わらない。

ただ、私が今の話で感じたのは、「教育」が根本に要るんですね。例えば、日本が先進的な技術を開発して世界をリードするためには、高等教育での最先端研究に十分投資して、それがペイするメカニズムを強化しないといけない。そして先進的な技術を供給する人を育成すると同時に、グッドユーザーを育てないといけない。それはライフスタイルと関係してくると思うんです。

エネルギーや環境の問題は、我々の生活や価値観、歴史などと結びついている。だから、国際競争に勝てる技術教育と同時に、経済的利得だけでない別の価値観を育む複合的な教育システムをつくっていけるかどうか。

今、日本が直面しているのは、いわば「百年に一度の人材危機」。中国の台頭を考えても、GDPでしか経済、外交を考えられない日本であれば、中国に抜かれることは必定なわけです。GDP規模とは違う、暮らしの質など多様な観点から国の形を考える意味でも、複合的な価値観を持った人材を育成することが大事です。

生活スタイル変革と技術革新を促すインセンティブとしての市場メカニズム

伊藤　低炭素社会づくりは、ある意味で地球規模の資源配分の大きな変化ですよね。つまり、生活スタイルを変え、都市の構造を変え、使う技術を変える。人類の歴史を見たときに、教育と説得と計画と自己努力で、これだけのことをなし遂げたケースはないんです。

残念ながら人間はインセンティブの奴隷です。どんなに環境が大切と思っていても、高速道路がタダなら車で出かけてしまう。となると、一人ひとりの個人なり企業にとって低炭素社会こそ得であるという環境をつくるしかない。それにはマーケットメカニズムが不可欠です。

これは二つ意味があって、低炭素なライフスタイルに飛びつくには、そういう暮らし方にメリットがあること。もう一つは技術革新で、企業はいくらものを安くつくっても存続できない。ほかの企業にない新技術を生む技術競争によって、初めて生き残るわけです。これから十年、とにかく低炭素でないと企業は生き残れないとなると、すごく違ってくる。だから二五%削減の提案は、日本がどこに向かうか方向性を示したということ。方向が変えられないなら、そこで初めて技術革新が起きてくる。

山家　二五%削減は〇五年比では三割を超すわけです。だから不可能だと思いがちだが、ベンチャーの人に言わせると、太陽光もバッテリーも今の次世代研究が実現すると劇的に変わる。突破するネタはあるが、日本はベン

ヒートポンプ
空気中などにある熱（ヒート）を汲み上げ（ポンプ）、冷暖房や給湯に利用するシステム。自然の熱を利用するため「再生可能エネルギー」とされている。

エピステミック・コミュニティ
問題認識を共有する専門家集団。アメリカの国際政治学者ピーター・ハースの定義によれば「特定の領域において専門性と能力があると認められ、その領域内で政策に関連する知識を正統に主張しうる専門家のネットワーク」。

チャーの技術に対価を払わないので実現できないんだと。

伊藤　一つ素朴な疑問は、一九九〇年比二五%削減というのは、日本は何年頃の生活に戻ればいいのか。一九七〇年なのか、七五年なのか、八〇年なのか。非常に乱暴な議論だけれども、一九八〇年が今よりも特に不幸だとは思えない。当時に比べれば、省エネ技術は数多くある。その点にもう少し目を向けてもいいのではないか。

環境・貧困・人口という国際社会の潮流を視野に日本の動き方を考える

村田　それで思い出したのは、「殺すよりも盗むがよく、盗むよりもだますがよい」というチャーチルの言葉。「殺す」は軍事力の発動、「盗む」は経済的搾取、「だます」は価値やイメージの操作。国際政治は、力と利益と価値という三つの体系から考えないといけない。

おそらくG20を構成する国々は、「殺すよりも盗むがよい」という段階までは確実に来ている。でも、この先、「盗むよりもだますがよい」（価値共有）に行けるかどうか。そのときに、確かにインセンティブは要る。だけど今、ネットでつながるエピステミック・コミュニティ——知的共同体が国境を超えて広がっている。長期的利害を考えられる人々の層が増えていることは、「だますがよい」に一歩近づいているのではないか。そういう層を拡げる意味でも、教育に対する投資が必要だと思います。

伊藤　きょうのお話、非常に面白くて、グローバル社会のトレンドは、今、我々の足元で大きく変わっている。ベルリンの壁が崩れた頃は、グローバル経済でどうやって貿易自由化や投資の活性化を図るかという話だったが、これから十年を考えたとき、キーワードは一つはやはり「環境」です。二つ目は、テロを引き起こしかねない「貧困」。単に貧困国に対する人道的問題というよりは、それ自体がグローバル・セキュリティの問題になっている。そして「人口」。これらのグローバルなトレンドのなかで日本はどうすべきかを考えないと、これからの我々の社会のあり方、国のあり方は描けない。

山家　低炭素社会に向けて、世界は結構したたかな戦略を立てている。日本も、低炭素を視野に国益を行使するような戦略が必要な時期になっているんですね。

村田　日本が難しいのは、グローバルなトレンドと同時に、近隣に北朝鮮問題など極めて二十世紀的な脅威が併存していること。日本の持つリソースが減るなかで両方への対処が必要で、非常に苦しいことは確かです。

伊藤　それだけに日本の力が試されるわけですね。

本日はありがとうございました。躍

編集／田窪由美子

［滋賀編］

琵琶湖から祖国へ、循環思想を伝えたい

馬 樹茂 書画家

「蘆葦春秋曲」
（90cm×1000cm）
琵琶湖の四季と
環境の循環を描いたものだ

琵琶湖との出会いは、来日直後の二十年以上前。仏画を学んでいた私に、知人たちは「観音の里を案内しよう」と言って、琵琶湖をぐるり、湖北の方まで案内してくれた。自然のなかに佇む寺や仏像。中国の敦煌に似た風景に胸を打たれた。

特に近江八景には懐かしさを覚えた。中国で古くから理想郷として描かれている「瀟湘八景」にちなんだものということもある。ただそれよりも、美しい自然を前にしたとき人の心に生まれる感動は、国境を超えて通じるのだと実感した。

琵琶湖との二度目の出会いは十年前。ある画家の比叡山麓のアトリエに招待されたとき。そこからは、琵琶湖がまるで庭のように見渡せる。自分もこういう環境で絵を描きたい。その思いが強まった。

芸術と自然環境は切り離せない。十九世紀、バルビゾン派や印象派の画家たちは街を出て、田舎で創作に打ち込んだ。日本の紫式部も千年前、琵琶湖畔の石山寺から月を眺め、源氏物語のインスピレーションを得たのかもしれない。私もまた昼となく夜となく琵琶湖を巡り、風の音や月の光を感じることが創作の源泉だ。

滋賀に居を定め、改めて気づいたのは、この地に根づく循環思想だ。ヨシ（葦）はその象徴かもしれない。鳥や魚の産卵の場所となり、枯れれば燃やされて畑の肥料となる。そのヨシで紙をつくったところ、墨との相性もよい。その紙に私は何枚も何枚も琵琶湖の絵を描いた。芸術を通して環境への関心を高めたいと「湖都百景芸術大賞展」を発案したのも、この地に暮らしたからこそ。自然の循環をテーマに全国から作品を募り、〇八年には北京でも展示を行った。

祖国中国は今、欧米をモデルに急速に経済成長を遂げているが、環境への配慮を忘れてはならない。敦煌の近くにある「月牙泉」は三日月型の美しい湖。しかし地下水の汲み上げにより、年々その湖面が小さくなっているのは悲しいことだ。

自然の循環を尊重している場所には、素晴らしい風景が存在する。それは大切な自然遺産、文化遺産であり、失われてはならないものだ。絵描きは微力かもしれないが、アートで人の心に訴えるのが使命。今こそ日本の循環思想・琵琶湖の循環モデルに学んでほしい――ここ琵琶湖から、祖国、そして世界に向けて伝えたい。躍

Ma Shumao　マ・シューマオ　書画家
1955年中国北京生まれ。天津美術大学卒。89年京都市立芸術大学修士課程入学、上村淳之に師事。92年国際日本文化研究センター研究員となり日中比較文化を研究。優れた美術作品を通じて琵琶湖の環境保全を考える「湖都百景芸術大賞展」を発案、06年より毎年開催。白馬国際藝術会主宰。西安培華学院教授·芸術設計学院副院長。画号は茂山人。
http://hakubakai.org/
http://plaza.rakuten.co.jp/mosanjin/

アジアに向く関西

世界の新しい牽引役として成長を続けるアジア。
そのアジアと長い歴史的・文化的つながりを持つ関西。
アジアに向き、アジアの人々との関わりのなかで
試行を続ける関西の姿を追ってみた。

異国のまちなみ。神戸南京町の南京東路

特集❷［ルポ］MOVE ザ関西

神戸・南京町

明治開港以来の“共生型”チャイナタウン

「神戸復興の灯」をともす

神戸のJR元町駅東口から少し南へ。ビルの谷間に建つ白亜の長安門をくぐり、赤や黄、緑など極彩色に彩られた神戸南京町に入る。南京町広場を中心に東西、南北に伸びる街路の両側に、中華レストラン、餃子や豚まん、点心、ラーメンなどの店、中華食材や中華雑貨、和洋食レストラン、中国茶、喫茶やスイーツ、漢方薬などの店が軒を連ね、そぞろ歩きするだけで心が浮き立ってくる。

神戸南京町は日本三大中華街の一つで、活気ある〝異国情緒〟に満ちている。しかし、南京町商店街振興組合理事長の曹 英生さんによれば、現在、振興組合加盟店九十五軒のうち、中国系と日本系の割合はほぼ半々で、日本社会にしっかりと根づいた、ユニークな〝共生型〟チャイナタウンである。

そんな神戸南京町の人々の心意気が存分に発揮されたのが九五年一月の阪神淡路大震災直後だった。

「このままだと神戸も人口流出しかねない。神戸の人々に、熱いものを食べてもらい、早く元気になってもらおうと、振興組合で炊き出しをすることに決めました」と曹さんは振り返る。被害が比較的軽かった南京町では、炊き出し当日、二十店舗近くが屋台を出し、熱々の饅頭やラーメン、コロッケなどを提供。同時に義援金を募り、営業を再開し、多くの被災者たちの胸に〝復興の灯〟をともしていった。

また、神戸華僑歴史博物館館長の藍 璞さんによれば、震災直後、神戸華僑の子弟が通う神戸中華同文学校が避難所として被災した周辺住民を受け入れ、地域の人々との親密さが一段と深まったという。

「震災で失ったものもたくさんありましたが、それによって、楽しいことは一緒に喜び、悲しいことも一緒に悲しみ、みんなで頑張っていこう、という気持ちの人が増えたのが嬉しいですね」（曹さん）

華僑が世界で一番「現地化」したまち

神戸華僑の歩みは、一八六八年一月の兵庫（神戸）開港とともに始まった。「初期の神戸華僑は貿易関係や居留地関係の洋服仕立、理髪、料理人、靴職人などで、彼らは居留地西側の雑居地に暮らし始めました」（藍さん）。

その一角に、華僑向けの食材市場となる南京町が誕生。居留地周辺が賑わい、華僑人口が増えるに従って、神戸の華僑社会も発展した。明治半ば以降、山手方面に心の拠り所となる関帝廟や、中華会館、華僑学校（現・神戸中華同文学校）を開設。南京町には店が増え、漢方薬や

❶旧暦で祝う中国の正月・春節祭の龍踊りで活躍する、中国特製の龍
❷まちかどの屋台、メニューを選ぶのも楽しみの一つ
❸南京町広場は休息や記念撮影のスポット
❹蒸しあがったばかりの包子やチマキを並べる屋台

1

2

3

4

雑貨などは華僑商人が、生鮮食品や乾物などは日本人商人が扱い、大勢の買い物客で賑わったそうだ。
しかし戦争で神戸は空襲に遭い、南京町一帯も焼け野原となった。戦後は、民間貿易の再開で港湾都市神戸が復興、貿易業務に精通する華僑たちが活躍した。もっともこの頃から、神戸中華同文学校を卒業後、家業を継がず、日本の高等教育を受けて日系企業へ就職する若者も増えた。藍さんによれば、華僑社会の日本化が進んだわけで、「世界で一番現地化したのが神戸の華僑だと思います」と言う。
戦後の南京町に生まれ育った曹さんによれば、少年期、南京町には外国人バー以外、一軒の中華料理店と中国の乾物店くらいしかない頃もあった。そこで七〇年代後半、南京町の復活を願う店の人たちが南京町商店街振興組合を結成。区画整備事業を始め、八五年秋に長安門を竣工させた。「ハードが揃った。次はソフトだ、と青年部を中心に春節祭を企画しました」（曹さん）。八七年一月末の第一回春節祭には四日間で二七万人の観光客が集まり、長大な龍踊りや獅子舞、拳法演武、中国舞踏などを楽しみ、南京町は一躍、全国的な観光地となった。
「中国では今も正月は旧暦で祝います。春節祭は、日本の人たちに中国文化を知ってもらういい機会です」と、藍さんは笑った。

❶商売の神としても知られる、三国志の英雄・関羽を祀った関帝廟
❷神戸華僑の子弟が通う神戸中華同文学校
❸神戸華僑歴史博物館に展示されている、南京町の春節祭と中秋節のパンフレット

1

2

3

白浜の名所・円月島をバックに記念撮影するマカオからのツアー客

和歌山・白浜

ようこそ、温泉好きのアジア人観光客

アジア発、関空・白浜空港へ

前日午後、関西国際空港から白浜に直行。宿泊先のホテルで名物の海鮮料理と梅樽温泉を堪能したマカオからの「美食」ツアー客は、朝八時半、ホテルを出発。名所千畳敷や三段壁、円月島を巡って海と岩が織りなす雄大な風景を楽しみ、北上して、和歌山マリーナシティ内の黒潮市場に到着。目の前で解体されたマグロの刺身に舌鼓を打ち、みかん狩りののち、和歌山城を見学。その後、京都に向かった。
和歌山県では、地元の観光業界と自治体による、海外、特にアジアでの積極的な観光客誘致活動が効果を発揮。和歌山県観光局によれば、温泉や海鮮料理、海や山、春の桜や秋の紅葉などが好評で、〇八年の、同県への外国人観光客（宿泊者延べ数）十六万八千余人のうち、台湾、香港、韓国、中国などアジアから十二万一千余人と、七割以上を占めた。
「これまでアジアからは団体客が多かったのですが、近年は家族や小グループの個人客で『クエを食べたい』『温泉に入りたい』『ゴルフをしたい』『世界遺産の那智の滝を見たい』と、それぞれ目的を持って来られる方が増えました」と白浜観光協会会長の中田 力さんは語る。
中田さんによれば、主要ルートは関空からだが、最近

は中部国際空港から伊勢、勝浦経由で白浜に入り、関空から帰国する台湾や香港からの観光客も少なくないとか。また和歌山県による南紀白浜空港への国際チャーター便の誘致にも成功。〇九年一月から四月までの四カ月間で、台湾から合計十八便、二〇九四人が来訪された、と和歌山県南紀白浜空港管理事務所総務課長の生駒健夫さんは言う。

観光客誘致行脚と名物づくり

白浜の観光業界が初めて台湾へ観光客誘致に出かけたのは三十年ほど前。豊かになった日本人が国内観光から海外観光へとシフトしていった頃だった。

「外国の方々は、まず東京や京都などの大都市に行かれます。そこで二回目、三回目はぜひ和歌山の温泉地へ、と訴え、フェリー会社と提携し、東京から船旅を楽しんでもらって那智勝浦港に入り、白浜に一泊。帰りは大阪の日本橋で電気製品を買って帰国する、というルートをつくり、とても評判がよかった」（中田さん）

以後、白浜の人たちは、香港、韓国へと誘致活動を拡大。九四年、アジア路線の充実する関西国際空港が開港し、アジアからの来訪者は着実に増えていった。しかし、単に誘致活動をするだけではお客は来ない。白浜では、地道に観光基盤の開発に取り組んだ。

例えば、〝幻の魚〟と言われるクエなど、いくらおいしくても水揚げが少なければ、〝名物〟として訴えるこ

白浜のホテルから観光バスに乗って、名所ツアーに出発

和歌山・白浜

❶白浜名物の一つ、特産の梅漬け樽を再活用した、梅樽温泉
❷和歌山マリーナシティ内の黒潮市場でマグロの解体ショーを見学
❸みかん狩りを楽しむ

とはできない。そこで三十年ほど前、中田さんたちは地元にある近畿大学水産研究所にクエ養殖法の開発を依頼。近年、ようやく地元の名物料理として確立した。

また、二〇〇〇年にはハワイのホノルル市に働きかけて、白良浜とワイキキビーチの姉妹浜提携を実現。相互の観光交流を深めるだけでなく、アジアの人々に白浜でワイキキ気分を味わえることをアピールしていった。二〇一〇年九月にはハワイアンデーを設け、フラダンスの発表ステージをつくる計画もある。さらに、アジアでは韓国・ソウル近郊の果川市と友好姉妹都市提携を結ぶなど、今後の観光客誘致促進に向けて地域をあげて取り組んでいる。

「観光地も進化しないといけません。東アジアの方々が日本に来やすい環境をつくり、白浜を〝ハブ〟に、徳川御三家の本拠・和歌山城や、世界遺産の熊野、那智勝浦へと、日本を体験できる旅を提案しています」と中田さんは力を込めた。

大阪・ミナミ

買い物客を惹きつけるエネルギッシュなまち

アジアからのショッピングツアーのメッカ

中国からのツアー客だろうか。黄色い旗を持った添乗員を先頭に、二十人前後の観光客が道頓堀通を歩き、戎橋筋との交差点で散開。三々五々、難波方面や心斎橋筋方面、ブランド店が並ぶ御堂筋方面へ向かって歩きだした。大勢の通行客に交じるとわからないが、今、ミナミには、毎日、アジアからのグループや個人観光客が詰めかけ、ショッピングやグルメを楽しんでいる。

戎橋筋商店街振興組合が加盟店を対象に実施したアンケート調査結果によると、売上の何割かはアジアからの観光客という店がほとんどで、なかには売上の三〜四割を占めるケースもあった。ミナミでのショッピングで目立つのは、ドラッグストア（薬や化粧品）やアクセサリー、ファッション、バッグの店、家電店や百貨店など。グルメでは、道頓堀界隈のたこ焼き、ラーメン、寿司や海鮮丼などが好評で、クチコミで広がる一方とか。同じ大阪でも、キタと違って、ミナミはアジアの都市に似て、どこか混沌としたエネルギーに満ちている。アジアの人々は、ショッピングやグルメだけでなく、まち自体を楽しみに来られているのではないか、と戎橋筋商店街振興組合の活性化事業統括マネージャー・山本英夫さんは言う。

そんなアジアからの観光客により楽しくまち歩きを体

道頓堀を行く中国からのツアー客

験してもらうために、同振興組合では、難波にある専門学校の留学生と教員たちの協力を得てモニタリング調査を実施。外国人客が来店しやすい接客ポイントを提案し、各店に応じた接客ツールや外国語表記マップを作成し活用している。実際、老舗の蒲鉾店が販売する揚げ立ての天麩羅に外国語の説明文を掲示したところ、食べ歩きやホテルでの夜食用に購入するアジアのお客が増え始めたとか。

「異国へ行ったら、誰でも異国文化に触れたいと思うはず。受け入れ側の店が、小さな工夫でも、できることから取り組み、ミナミの良さ、面白さを伝えていきたいですね」（山本さん）

家電もポップカルチャーも

アジアからの買い物客が目指すミナミの名所の一つが、電気部品店や家電店が集まる日本橋筋商店街界隈だ。最新の情報家電を選んだり、地区内にある免税ショップで、帰国前にカメラや時計、貴金属などを買っていくアジアからの観光客も少なくない。

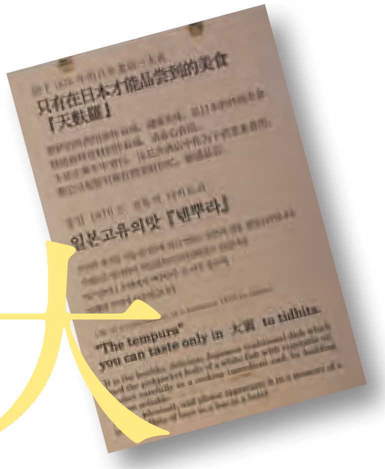
同地区周辺には専門学校に学ぶアジア人学生が多数暮らしていて、国際色豊かな若者のまちとしての側面もある、と日本橋筋商店街振興組合理事の塩田浩司さんは言う。流行に敏感な若者の集まる日本橋筋界隈は、塩田さんによれば、九〇年代以降、パソコンからゲームソフトへ、映画ビデオからアニメビデオ、アニメDVDへ、さらにキャラクターグッズやフィギュアへと新陳代謝し、近年は、週末、マニアやオタク向けの店が並ぶ「オタロード」が賑わっている、とか。

そんななか、同振興組合では、〇八年以来、関西国際空港とタイアップして、毎年九月に「ジャパン・ポップカルチャー・フェスティバル」を開催。〇九年七月、塩田さんたちは、台湾最大のアニメイベントに参加し、大阪へのツアーを募ったという。

「韓国や台湾、中国の若者の間で、日本のアニメやファッション、音楽などのポップカルチャーが注目され、どんどん浸透しています。日本には、秋葉原だけなく、大阪の日本橋にもそんなポップカルチャーのまちがあることをもっとPRして、アジアの若者たちを呼び込みたい」と塩田さん。

日用品から衣料、雑貨、家電、ポップカルチャー、ブランド品まで、コンパクトなエリアで多様なショッピングが満喫できるミナミ。商店街の人たちはきょうもハングルや中国語のお客さんに笑顔で対応しているようだ。

大阪ミナミ



❶エネルギッシュなまち・大阪ミナミ、日本人に交じってアジア諸国からの観光客も多い
❷❸日本橋界隈には東南アジアからの若者も少なくない
❹電気部品店や家電店が集まる日本橋「でんでんタウン」
❺中国語やハングルの文字が目を惹く、戎橋筋商店街

1

2

3

4

5

❶留学生交流情報室で母国語の新聞を読むタイからの留学生
❷「My Country, My University」で自国紹介をする台湾からの留学生たち
❸「多文化コミュニケーションプロジェクト」の公開授業には多くの留学生が参加
❹互いの母国料理を味わいながら交流を深める「世界の料理パーティ」

大阪大学

留学生を"熱烈歓迎"

実学、漢字という共通点

各国の留学生がつくった母国料理を味わいながら留学生同士や日本人学生との交流を深める「世界の料理パーティ」、世界各地からの短期留学生が母国と母校を紹介する「My Country, My University」、学部所属の留学生と一般学生を対象とする「多文化コミュニケーションプロジェクト」の公開授業——晩秋の大阪大学豊中キャンパスで、阪大留学生センター提供のイベントが開かれた。中心となったのが、アジア諸国からの留学生だった。

○九年五月時点で、大阪大学在学の全留学生一四五五人のうちアジアの留学生は七七％。学部生なら約九割だということである。国別に見ると、中国四四三人、韓国二一五人、タイ九二人、ベトナム七九人、インドネシア六四人、台湾六三人、マレーシア五三人などが上位を占める。

なぜ、多くのアジア人留学生が阪大にやって来るのか。留学生センター副センター長（教授）の三牧陽子さんによれば、一つは、実学志向の強いアジアで、最先端の研究や技術を身につけようと、世界トップクラスの阪大の理工系分野を目指す留学生が多いこと。また、中国や韓国の人たちは同じ漢字圏で、歴史的・文化的つながりの深い関西に親近感を抱いていること。

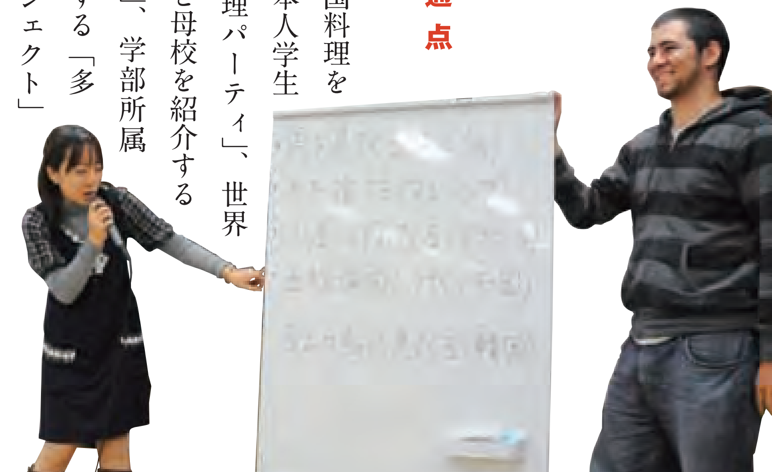
「中国や台湾の留学生は、留学前に日本語をきちんと学んでなくても、漢字を見れば大体意味が掴めます。また、日韓両言語は文法的に近いので韓国の留学生は上達が早く、『夏休み期間中に自学自習した』と流暢な日本語で話し、何年も日本語を学ぶ欧米からの留学生が驚くこともあります」と三牧さんは笑う。

さらにかつて阪大に留学し、母国の大学や研究機関で活躍する〝先輩〟に勧められて、というケースも少なくない。三牧さんによれば、日本の大学院に入ると、研究室の教員の指導や院生の手助けを得て、自分で研究計画を立て、自分のやりたい研究に取り組む力がしっかりと身につくため、留学への期待が大きいという。

地域ぐるみの留学生支援

そうしたなか、阪大に学ぶ留学生の日本語習得と交流や生活支援に取り組んでいるのが留学生センターだ。

留学生に、限られた時間で留学目的達成に不可欠な日本語をいかに習得してもらうか。とりわけ大学院進学を目指す大多数のアジアからの留学生には、専門科目の授業を理解し、日本語でレポートを書くといった、大学院入学後に必要となる〝アカデミック〟な日本語教育に力を注いでいる、と日本語教育部門担当の三牧さんは強調



する。また、短期留学生を中心に、留学生は総じて大阪での生活文化に好意的だ、とか。「みんな、フレンドリーな大阪人のコミュニケーションスタイルがすごく好きで、大阪に来てよかったと言ってます」(三牧さん)。

留学生の交流や生活支援は、吹田、豊中、箕面各キャンパス内の留学生交流情報室(IRIS)とボランティア学生が中心となって、ウェルカムパーティやキャンパスツアーをはじめ多様な交流会を開催。また、地域には留学生を家庭に招いたり、日本語教室を開くボランティア組織がたくさんあり、留学生センターと協力して、地域ぐるみで留学生を支援している、と同センター交流指導部門(教授)の有川友子さんは言う。ユニークなのは、地域の小・中・高校の国際理解教育への参画だ。当日、生徒たちは事前に調べた留学生の母国について発表。留学生たちは自国の言葉や音楽、踊りなどを実演して楽しく交流し、互いの国際理解に大いに役立っているようだ。

❶大阪大学留学生センターのある、吹田キャンパスのICホール
❷吹田キャンパスで語り合うアジアからの留学生たち

留学生センター長(教授)の菊野 亨さんは、世界の料理パーティ会場で留学生と一般学生が楽しく食べ、語り合う光景を眺めながら、「留学生受け入れ目的の半分は、一般学生がアクティブな留学生と交流し、国際的な視野のなかで学問研究を深めてくれることだ」と言う。

なお、〇九年度、大阪大学が「国際化拠点整備事業(グローバル30)」に採択されたことに伴い、留学生センターは今年度中に「国際教育交流研究センター」と名称を変え、一〇年度から受け入れ留学生倍増を目指している。

●

明治開港以来、神戸華僑社会の発展とともに育ってきた共生型チャイナタウン「南京町」、温泉リゾートとして賑わう「白浜」、アジアからのショッピングのメッカとして注目を集める「大阪ミナミ」、千人を超えるアジアの留学生が最先端研究に挑んでいる「大阪大学」——それぞれの地域特性を生かしながら、アジアの人々が暮らし、訪れ、学び、触れ合うなかで、アジアの一員としての関西の新たな生き方が育っていくだろう。耀

取材・撮影/伊田彰成　編集/田窪由美子

街の灯り物語

灯り——それは
そこに暮らしがある証
さまざまな心模様が描かれ
物語が紡がれている証
迎えてくれる灯り
見送ってくれる灯り
そして見守ってくれる灯り
街それぞれに灯りがあり
人それぞれに
心に残る灯りがある
その一つの物語

戻ってきた灯りに感じた人の温かさ

SAKURA

シンガー

神戸に育った私にとって、灯りといえば「夜景」。温かい光に包まれた街を眺めては、人々の暮らしに思いを馳せていた。

その光景が一変したのは、十五年前、阪神淡路大震災の時だ。当たり前だった日常は一瞬で崩れた。六甲の自宅はかろうじて無事だったものの、見下ろす神戸の街は灰色の煙に包まれ、ところどころに火も見えた。建物は壊れ、街灯もなく、夜になると街は真っ暗。電気がないと、こんなに暗いのかと実感した。瓦礫に埋もれた街の暗闇は、恐怖だった。

悲惨な状況を目の当たりにして、頭の中は真っ白。記憶は曖昧だが、電気がついたのは意外に早かった気がする。待ちかねていた母は、「ついたわ！」と大喜び。私にはまだ、手放しで喜ぶ余裕はなかった。活動の場を失い、余震におびえる状況は変わらない。

でも、気持ちを奮い立たせてボランティアに参加した。家族を失った人、テントで暮らす人。自分より大変な人は大勢いた。小さなことでも、私にできることをしていこう――そう考えるようになった。歌ううえでも、生活のなかでも、「人の役に立っているか」を優先するようになったのは、このときの経験がきっかけだ。

復興までの道は長かった。六甲から見る夜景に光が戻ってきても、ところどころ真っ暗なままの場所がある。それを辛い気持ちで眺めていた。私の家は高台だから、大阪まで見える。大阪の夜景は、以前と変わらない。光の量が違うのが切なかった。

そんな経験をしているからだろう。「街の灯り」の歌をレコーディングする際、灯りのある風景が次々に現れるCM映像を見た時は、胸がいっぱいになった。それは、ただの美しい街灯りの光景ではなく、私にとっては「戻ってきた灯り」。今もライブの締めくくりには、「街の灯り」をリクエストされることが多い。みんなが温かい気持ちになれる曲に出会えたことを、幸せに思う。

太陽や月の光は、自然が与えてくれるもの。それに対して電気の光は、人の手なくしては私たちのもとに届かない。自然の光が天使からの愛だとすれば、電気の灯りは、人の思いやりがこもったものだ。だからこそ、夜景も街の灯りも、こんなに愛おしく感じるのかもしれない。耀

SAKURA　さくら　シンガー
1972年スイス生まれ。大阪、神戸で育ちインターナショナルスクールで学ぶ。シアトル大学留学を経て帰国後、英語教師をしながらライブで経験を重ね、97年メジャーデビュー。06年関西電力CM曲「街の灯り」をカヴァー。神戸を拠点に音楽活動を行っており、2010年1月17日には兵庫県立文化体育館での「震災メモリアルコンサート」にスペシャルゲストとして出演予定（お問い合わせ:同体育館078-631-1701）。
http://www.singer-sakura.com/

©JOE KLAMAR/AFP/gettyimages

IAEA本部（ウィーン）

IAEAの役割と原子力平和利用国家・日本への期待

天野之弥 IAEA事務局長

世界の原子力平和利用に大きな役割を果たしているIAEA（国際原子力機関）。エルバラダイ氏の後を受け、二〇〇九年十二月、第五代IAEA事務局長に就任した天野之弥氏に、IAEAの今日的役割と日本への期待について、話を聞いた。

グローバル・イシューを解決する「助っ人」

現在、世界百五十カ国が加盟するIAEA（国際原子力機関）は、一九五三年のアイゼンハワー米大統領の国連演説「Atoms for Peace」を受け、五七年、「原子力の軍事転用防止」と「原子力の平和利用促進」という二つの目的を掲げて発足した。それから半世紀以上を経た今日、改めてIAEAの役割とは何かと問われたら、私は「原子力技術を通じてさまざまなグローバル・イシュー（地球規模の課題）の解決に寄与していくこと」と答えたい。

グローバル・イシューとは何かと言えば、一つは、「核不拡散」や「核セキュリティ」といった世界の安全保障に関わる問題。〇九年四月オバマ米大統領がプラハで「核兵器なき世界を目指す」と表明し、世界はようやく核廃絶への一歩を踏み出したが、今後各国が核軍縮を進める過程では、IAEAのような中立的な国際機関による検証が不可欠だ。

次に、エネルギーの問題。化石燃料に限界があるなか、原子力平和利用の中核「原子力発電」はエネルギー・セキュリティ上重要なだけでなく、今や発電時にCO_2を出さないエネルギーとして地球温暖化問題解決への一助になるという期待も高まっている。

さらに、世界的な食料危機や水問題に対しても、「放射線技術（アイソトープによるトレーサー技術）」を用いれば、地下水の循環を推定できるし、品種改良による食料増産や保存性向上、病害虫の撲滅などにも役立てることができる。

また近年、途上国でのがん発症率が激増しているが、これはなにも途上国の人が急にがんに罹りやすくなったわけではなく、検診設備が整い始めたことで発見されやすくなったことが主たる理由と考えられている。人の命の重さに先進国も途上国もない。今後、より多くの人々が放射線治療の恩恵を受けられるようにしていかなければならない。

このように安全保障からエネルギー・環境問題、食料問題、水問題、保健医療の問題まで、IAEAが取り組むべき課題は山のようにある。もちろん、いずれの問題もIAEAだけで解決できるわけではないが、相応の貢献は可能だと自負しているし、またそうでなければIAEAに将来はない。これまでIAEAは「核の番人」などと呼ばれることが多かったが、私はむしろ原子力技術を通じたグローバル・イシュー解決の「助っ人」を目指したいと思っている。

原子力ルネサンスの潮流のなかで

世界では今、「原子力ルネサンス」と呼ばれる原子力発電再評価の動きが広がっている。

この背景には、一部の地域や特定のエネルギーに依存することへの懸念、化石燃料価格の高騰への不安、地球温暖化問題の深刻化など、複数の理由があり、国によって動機もさまざまだが、世界的に原子力発電への期待が高まっていることは間違いない。二〇〇九年時点で、原子力発電所は世界三十カ国一地域で運転されており、うち十七カ国、新たに七カ国で新規の建設・計画が進んでいる（「世界の原子力発電開発の動向2009」より）し、強い関心を示している国も多数ある。

こうした国々に対し、原子力安全、核不拡散、核セキュリティなどの観点からお手伝いするのがIAEAの役割だ。ただしIAEAは加盟国の希望に沿った手助けをするだけで、原子力を導入するか否かは各国の判断。IAEAが本部を置くオーストリ

天野之弥　あまの　ゆきや
IAEA事務局長
1947年神奈川県出身。東京大学法学部卒業後、72年外務省入省。国際連合局科学課長、軍縮会議日本政府代表部参事官、在マルセイユ日本国総領事館総領事、大臣官房審議官（軍備管理・科学審議官組織）、総合外交政策局軍縮不拡散・科学部長などを経て、05年在ウィーン国際機関日本政府代表部大使。この間、IAEA理事会議長、2010年NPT運用検討会議第一回準備委員会議長などを務める。09年8月核不拡散・原子力担当大使、12月より現職。

アは豊富な水力資源があることから原子力を選択していないが、このようにそれぞれが自国の状況に照らして決めるというわけだ。

今後の見通しだが、十〜十五年程度の中期的スパンで見れば、実際に原子力発電が大きく増えるのは、中国、インドなど既に原子力を進めている国が中心だろう。これまで全く原子力発電の経験がない国で導入が大きく進むのは、二十年ほど先の二〇三〇年頃になるのではないか。

新たに原子力発電に取り組む、これらの国において、今は大切な「準備期間」。今から二十年後に原子力が飛躍的に伸びるかどうかは、今後十年間でどれだけ人材育成できるか、安全文化を定着できるか、組織や制度をきちんと整備できるかにかかっている。こうした基礎をしっかり築くことができれば、二〇三〇年頃にはより多くの国が、より安全な形で原子力発電の恩恵を受けられるようになるだろう。

私の任期中にどこまで実現できるかわからないが、まずは基礎づくりに全力を注ぎ、目に見える形で、一カ国でも二カ国でも途上国での成功モデルをつくりたい。

平和利用に徹した四十年の経験を世界へ

今後、新たに原子力発電を導入する国での基礎づくりを進めるにあたり、とりわけ原子力の平和利用に徹し、原子力発電に四十年以上もの実績を持つ日本が果たす役割は極めて大きい。

というのも原子力はこれまで、持てる者（先進国）と持たざる者（途上国）とが明確に分離されていた分野。途上国側には根強い疎外感、不公平感があり、IAEAの保障措置を負担に感じたり、核セキュリティについて「自分たちに原子力技術を持たせないためでは」と疑心暗鬼の目を向ける国さえある。

こうした声に対し、原子力先進国であり保障措置も積極的に受け入れてきた日本こそ、「原子力発電を進めるには、原子力安全や核セキュリティ、核不拡散に対し責任ある対応をするのは当然だ」ということを身を以て示すことができる。

人材育成の面でも、日本はチェルノブイリ事故後、東欧の原子力発電所運転員を対象に行った、いわゆる千人研修や、RCA（原子力科学技術に関する研究、開発及び訓練のための地域協力協定）に則ったアジアの原子力関係者の受け入れなど、以前からさまざまな人材育成協力を実施。当時、日本の大学や企業で学んだ人々が今、各国で原子力分野の要職に就いている。

今も、例えば日本トップクラスの原子力発電量を誇る福井県には、原子力技術教育に力を入れる福井大学もあれば、原子力発電所も初期のものから最新型、高速増殖炉まで揃っている。また運転ノウハウだけでなく、トラブル対応、地域住民とのコミュニケーションなど、順風のときも逆風の中でも、原子力を続けてきたことで得た貴重な経験、知恵がある。日本自ら原子力技術を磨き、人材を育成するとともに、こうした貴重な財産を世界にフィードバックしていくことが、原子力平和利用国家・日本の大切な役割だ。

IAEAのOSART（運転管理評価チーム）による
関西電力 美浜発電所3号機の調査（2009年1月20日〜2月5日）

原子力発電は、ウラン資源の採取・輸送から、プラント建設、運転、廃棄物の処理処分まで、ほとんどの過程で国際社会の協力が不可欠となる。どこか一カ所で事故が起きると、世界全体で原子力への信頼が揺らいでしまう。だからこそ原子力利用を進めるにあたっては、対立点でなく、共通の利益に目を向け、ともに協力しながら具体的な成果を上げていくことが信頼につながる。

小さな成功の積み重ねが大きな成功を呼ぶわけで、IAEAもすぐやること、一年以内、四年以内にやることなど、きちんと決めて、どんどん実行していきたい。私自身さしあたりすぐ着手したいことは、IAEAの保障措置分析研究所の近代化。分析・検証能力のさらなる強化は、IAEAの足腰を強化し、IAEAが中立性を担保する機関であり続けるためにも不可欠なことだ。また、原子力発電はやりたいが、もう少し先という途上国にとって、目の前の課題は食料であり、がん治療。放射線利用による、この分野での貢献はすぐにもできることであり、強化していきたい。

そして原子力が拓く地球の未来に向けて、日本こそが主導的役割を果たすことを期待している。躍

©JOE KLAMAR/AFP/gettyimages
IAEA理事会

長野県南木曽町「桃介橋」にて

エコルーツ紀行

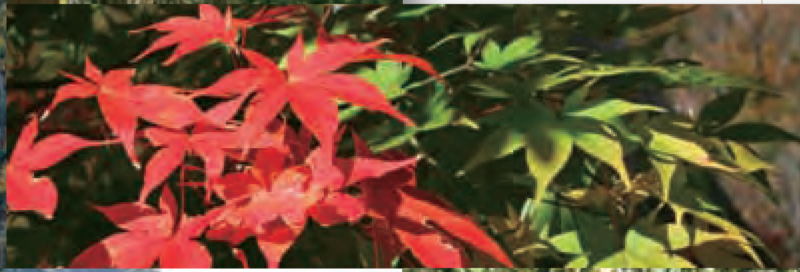
ミステリー作家 黒崎緑

大正モダンの電源開発、木曽川水系を行く

「木曽路はすべて山の中である」

そう書いたのは島崎藤村。『夜明け前』の冒頭文だ。木曽に生まれた彼の言葉どおり、豊かな水量の木曽川に沿って、連なる山の底を這うように木曽路は続いていた。

冬の気配を漂わせた山あいの町は、初めて訪れた場所だったのに、不思議と懐かしさを感じた。作物を収穫したあとの茶色い田畑、農家の軒先に吊り下げられた柿の実、色褪せた葉をわずかに残した木々。都会で生まれ育った私に、古里の記憶はない。それなのに、郷愁を感じるのは、なぜだろう？



▶浦島太郎伝説が残る「寝覚の床」。子供の頃はここで遊んだという、関西電力東海支社の洞田弘美さん(写真上)に案内してもらった

長野から木曽谷を下り、濃尾平野を蛇行して伊勢湾に注ぐ木曽川。大正期に大同電力(現・関西電力)を設立し、電力王と呼ばれた福沢桃介(1868-1938)は、「一河川一会社」(1つの水系の発電施設は1つの会社が一貫して建設・運用してこそ理想的な水力利用ができる)を唱えて木曽川水系を開発。現在、木曽川水系には32の発電所がある、と「木曽川電力資料館」で関西電力木曽電力システムセンターの早川雅人さん(写真上)が教えてくれた。

▼関西電力の妻籠発電所は、桧の黒板塀がシック

▲木曽路を経由して江戸と京を結んだ中山道の「妻籠宿(つまごじゅく)」

日本人の原風景

木曽八景の一つに、「寝覚の床」と呼ばれる景勝地がある。木曽川の激流に、花崗岩が侵食されてできた自然の彫刻で、白い巨大な奇岩の数々が深緑色の水に映えて、美しい光景だった。JR特急「しなの」の車内アナウンスでも紹介された。それによると、浦島太郎伝説の終着点と言える場所のようだ。

浦島太郎は竜宮城から戻ってくるが、実は長い年月が経っており、知人も亡くなっていた。傷心の彼は旅に出て、木曽川の美しい風景に辿り着く。そこで彼は、乙姫から貰った玉手箱を開ける。結末は……よく知られた民話どおり。彼は今までのことが夢で、この地で目が覚めたかのように思った。このことから、この場所が「寝覚めの床」と名づけられた、という話である。この伝説によると、彼はどうやら木曽の地で余生を送ったようだ。

漁師の浦島太郎は、海の町の生まれ育ちだろう。それなのに、なぜ木曽の山里を選んだのだろうか。場所があまりにも美しかったから? 激しい水流と奇岩が、海を思い出させたから? それもあるだろうが、彼もまた、初めて見るこの地に、懐かしさを感じたのではないだろうか。木曽川沿いの町は、日本人の原風景とも言える風情を携えている。

電力王・福沢桃介

その木曽川の激流を止め、発電所建設に道を切り開いた男がいる。大正時代に本格的ダム式発電所を日本で初めて造り、のちに「電力王」と呼ばれた福沢桃介だ。彼の建設した発電所の数々、大正時代の景観を残すダム、未来への夢を架けた橋へと、木曽の地を訪ねた。私の旅は、過去のお伽話から、近代のドラマチックなサクセス・ストーリーへと続いていった。

その姓から連想されるとおり、福沢桃介は福沢諭吉の娘婿だった。幼い頃から神童と言われた彼は、諭吉の目に留まり、養子縁組を持ちかけられる。承諾の条件として、米国留学をあげたらしい。若い頃の彼の写真は、利発そうで、なかなかのハンサムだ。その目は、はるか遠くを見つめている。

米国留学は、桃介に大きな影響を与えたのだろう。事業の方法だけでなく、近代的な建物を数多く見て、美意識を培ったに違いない。彼は木曽川に大正八(一九一九)年から十五(一九二六)年にかけて、賤母(しずも)、大桑、須原、桃山、読書(よみかき)、大井、落合の順で、七つの水力発電所を建設しているが、どれも個性的でロマンに溢れている。

桃介の開拓者精神

桃介の時代——今から百年近く前、近代化の途上にあった日本において、電気事業はチャレンジ精神をかき

桃介は、木曽川水系に7つの発電所を建設。寝覚の床から水系を辿ると、桃山発電所（1923年竣工;写真左）、須原発電所（1922年竣工;写真下中）、大桑発電所（1921年竣工;写真下左）、そして桃介が最初に建設した賤母（しずも）発電所（1919年竣工;写真下右）が見えてくる。いずれも発電所の概念を覆す洒落た外観で、周囲の景観にしっくりと溶け込んでいる。木曽川水系でつくられた電気は、当時も今も大消費地である関西へ送られている。

▲大桑発電所

▲賤母（しずも）発電所

立てるものだった。日本で電気が一般的に使われ始めたのは明治二十年代で、この頃は小さな火力発電所しかなく、停電も頻繁に起きていた。日本の経済力が増すにつれ、大量の電気をより安く、停電することなく使いたい、という要求は強くなっていく。

それに応えようとしたのが、桃介だ。彼は自ら中央アルプスの奥地に入り、調査を重ね、木曽川の豊かな流れが、日本の電力の供給に新しい未来をもたらすと考える。そして、水力発電所の建設に着手するのだ。

彼が造った七つの発電所の中でも、建設に困難を極めたのは大井発電所だった。工事期間中に何度も洪水が襲う、関東大震災により資金が行き詰まる。建設断念かとも言われたが、桃介は海外に資金調達に出向いて、この苦難を乗り越えた。日本初の本格的ダム式発電所を完成させたのだ。

木曽川水系で生み出された電気は、これもまた桃介によって造られた延長二〇〇キロ以上に及ぶ送電線で関西に送られ、日本の近代化に大いに貢献することになる。

遊び心とこだわりの意匠

風光明媚な木曽川に発電所を築く時、桃介は周囲の景観に、ずいぶんと配慮したようだ。それぞれの発電所は、外観意匠を巧みに変えている。美しい自然を見るのも好きだが、私は人間が創造したものを見るのが大好きだ。そこには、夢と希望と、知恵と努力が表れている。長い年月を経ても、強い意志は色褪せていない。

寝覚の床から川沿いを下ると、まず見えてくるのが桃山発電所だった。白い四角い建物は、中世ヨーロッパの小さな城塞のように見える。建物に引き込まれた黒い鉄管がなければ、ここで電力を生み出しているとは、わからないだろう。最初の出会いで、発電所という概念を覆されてしまった。

その下流にあるのが須原発電所。こちらも白い洋館風だが、波模様のある切り立った屋根の上に、小さな塔が見えた。まるで西洋の寄宿学校のようだ。聞くと換気口とのことだったが、実用性だけを考えるなら、わざわざ塔の形にすることもない。桃介の遊び心、デザインへのこだわりが表れている。

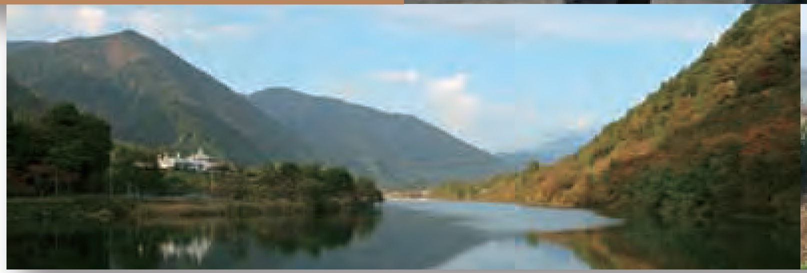
さらに下流に向かうと大桑発電所が見えてくる。こちらは対照的な赤い煉瓦造りで、モダンな女学校という雰囲気だろうか。思わず、可愛い、と女子高生みたいな声をあげたくなる。

現役の近代化遺産

そして、近代化遺産として発電設備で初めて国の重要文化財に指定された読書発電所。白い建物は外壁の上辺に凝った装飾がされ、半円形の窓や屋上に突き出た明り取り窓が、アールデコ洋式を感じさせる。小さなホテルといった趣だ。

発電所内部は、外観の装飾とは対照的に、現代的に

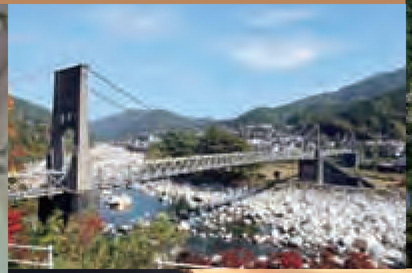
桃山発電所竣工の1カ月後、1923年12月に竣工した読書（よみかき）発電所（写真上）。完成時の出力は40,700kWと、当時としては記録的な大容量だったという（現在117,100kW）。読書の名は、明治初頭に「与川（よがわ）」「三留野（みどの）」「柿其（かきぞれ）」の三村が合併したとき、頭文字をつないだ村名「読書村（よみかき）」（現・南木曽町）に由来しているそうで、本館は鉄筋コンクリート造りのレンガ壁、半円形の飾り窓がモダン。

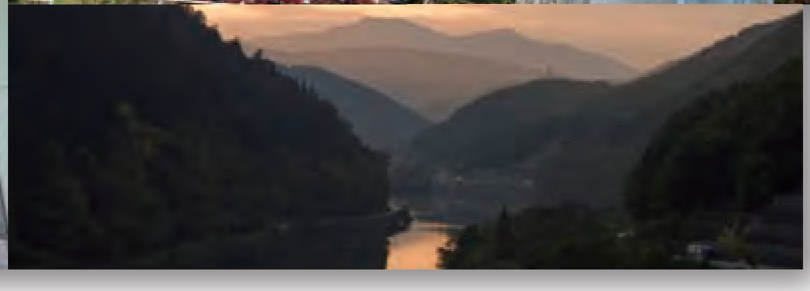


▲読書（よみかき）ダム

▲落合発電所（1926年竣工）

柿其(かきぞれ)水路橋（写真右）。読書発電所への導水路のうち、柿其川を渡る全長142.4mの鉄筋コンクリート造りの水路橋。1994年、読書発電所本館（写真上）と水槽・水圧鉄管（写真左）、柿其水路橋と、南木曽町所有の桃介橋（写真下）が、近代化遺産として国の重要文化財に指定された。これは発電設備として、また今なお稼働している設備としても初の快挙だという。





なっていた。木曽川の水力発電所は、今はすべて無人で名古屋で制御されている。機器の異常の知らせが入ると、設備を保守する人が出動することになっている。点検のための分解工具の大きさや多さに、ちょっと驚かされる。完成当時に最大級の出力を生み出していた発電所は、現在も大切な電気を私たちに供給し続けてくれていた。

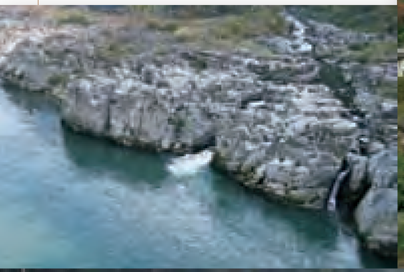
読書発電所に水を引き込むための柿其(かきぞれ)水路橋も、重要文化財に指定されている。二連のアーチと多数の支柱で支えられ渓谷を横断する橋は、現存する戦前の水路橋では最大級の規模だ。人力に頼っていた大正時代に、山中にこういった建物を造るのは、どれだけ大変だったろう。水路には滔々と水が流れ、今でも現役で活躍している。

読書発電所の建設資材運搬のために、木曽川に架けたのが桃介橋だった。長さ二四七メートルの木製の吊り橋は、遠くから見るとダイナミックで、そばで見ると頑強で優美である。三基あるコンクリートの主塔の二重アーチが凝っていて、大正モダンを感じさせる。実用本位なだけではなく、木曽川の景観に調和している。この橋自体は、付近の公園の整備と合わせて、近代化遺産として修復・復元されたものだそうだ。渡る人は多く、今でも住民の大切な通路になっていた。橋板には資材運搬用トロッコのレール痕がところどころ残されていて、当時の大事業を思い起こさせる。

苦難の末に完成させた大井発電所も、そばの大井ダムの堰堤(えんてい)が生活路になっていた。大正十三（一九二四）年という時に、深い渓谷に、この巨大なダムが造られたこ

 読書発電所の水圧鉄管。大正時代から使われているものだ

柿其水路橋の上に登ると、足元の水路を水が滔々と流れているのが見える



長さ276m、高さ53mの巨大なダム堰堤を持ち、日本初の本格的ダム式発電所として、1924年竣工した大井発電所（写真上）。工事に携わった人は延べ146万人。工事中、桃介が作業員を激励しようと、空中ケーブルで深い谷底へ降りたとき、危険を顧みず行動をともにしたのが川上貞奴だったというエピソードが残されている。

とは驚異的だ。その苦労は想像の中にしかない。通路は手摺りの装飾が美しく、吊り下げられた外灯にも、大正ロマンの風情が残っている。桃介もここを歩いたのだろうか。豊かに水をたたえたダム湖は、恵那峡という名勝地を造り出した。自然と人間が協力して生み出した美しい風景だ。

普明照世間

福沢桃介がこの数々の大事業を成し遂げた時、彼のそばには、事業パートナーとして、日本初の女優としても活躍した川上貞奴がいた。当時の二人の様子を垣間見ることができるのが、桃介橋近くの福沢桃介記念館と、名古屋市にある二葉館だ。

福沢桃介記念館は、発電所建設現場に通う別荘として建てられたもので、お洒落な洋風建築だが、電力王の別荘にしてはやや小ぶりに思えた。豪奢と言うよりは、しっとりと落ち着きがある。だが、中に入ってみると意外に広い。当時の調度や遺品が展示されていて、興味深い。庭は、秋は貞奴が好きな紅葉で彩られ、春は桃介がドイツから輸入したという一本の木に三色の花を咲かせる桃が、咲き乱れるそうである。

対して名古屋の二葉館は、オレンジ色の屋根が目を惹く、大きくて豪華な造りの建物だ。大広間は美しいステンドグラスで飾られ、電気の灯りを効果的に配している。こちらは華やかな社交場だったのだろう。人々を招いて、

読書発電所建設時の宿舎(別荘)として使われていた建物を復活させた「福沢桃介記念館」(写真上)。洒落た洋館に、当時の調度やゆかりの品々が展示されている。また、政財界人や文化人たちを招き、電気の素晴らしさをアピールするサロンとして使われていたのが、名古屋の「二葉館」(写真下)。大広間の赤い螺旋階段、ステンドグラスや、ほのかな灯りに、大正ロマンが香り立つ。

自らの事業、電気の素晴らしさをPRしたそうで、記録によれば庭には電気じかけの噴水やサーチライトまであったとか。当時の桃介の勢いと、貞奴の華麗さが表れているようだ。ただ、二階には和室があり、仕事を離れたくつろぎの場所だったのかもしれない。絢爛と簡素が同居している。建物はその調和で成り立っていた。

●

「普明照世間(ふみょう世間を照らす)」——大井発電所にある碑に書かれた言葉で、観音経の詞句だ。意味は「あまねく世間を明るく照らす」。福沢桃介が選んだ句だとか。

電力が不足していた大正の時代に、安定した供給をし、世の中を明るく照らそうとした男がいた。その志は、今でも形として残って、純国産のエネルギー供給源として、未来へと受け継がれている。躍

黒崎 緑 くろさき みどり
1958年兵庫県生まれ。同志社大学文学部卒。大学で推理小説研究会に所属。89年『ワイングラスは殺意に満ちて』でサントリーミステリー大賞・読者賞受賞(95年テレビドラマ化)。他の著書『聖なる死の塔』『闇の操人形』『棺の花嫁・聖なる血の城』『揺歌』『しゃべくり探偵』『死人にグチなし』『未熟の獣』など。09年4月にはケータイ小説と連動したNHKドラマ「探偵Xからの挑戦状!」の原作も手がける。
http://homepage1.nifty.com/chameleon/kuro/

撮影/山内厚美

編集後記

二〇一〇年代の幕が開きます。

百年に一度と言われる世界的な経済危機からの回復は未だ見えてはきませんが、中国をはじめとする新興国の台頭など、世界の潮流は確実に変わりつつあるようです。こうしたなかで日本はどう動けばいいか——伊藤元重さん、山家公雄さん、村田晃嗣さんにお集まりいただいた鼎談では、「二〇一〇年代の日本の進路」を語り合っていただきました。

鼎談でも動向が注目されたのが、躍進著しい中国でありアジアの国々。関西とアジアは、歴史的にも現在も深いつながりがあります。関西に暮らす中国の人、観光客や留学生として訪れるアジアの人々とそれを受け入れる関西の人。「ルポ」では、そんな元気なアジアとの交流の今を探りました。

一方、百年近く前、電気事業は「新興」のビジネス。起業家精神溢れる人々が競って参入していた時代がありました。「エコルーツ紀行」では、大正期、木曽川水系の電源開発に挑んだ「電力王」の足跡を、黒崎緑さんと辿り、当時の発電所が今も現役で働いているさまを見てきました。

変えるもの、変えないもの——困難な時代にも躍進を目指したベンチャーたちに学び、『躍』も二〇一〇年、もう一段の飛躍を目指したいと思います。

躍

題字 森 詳介(関西電力株式会社取締役社長)

『躍』(やく)という誌名は、皆さまとともに「躍進」「飛躍」していきたい、
また皆さまにとって「心躍る」広報誌でありたい、
との思いを込めて名づけました。

『躍』の内容はホームページでもご覧いただけます。
http://www.kepco.co.jp/yaku/

発行●関西電力株式会社 地域共生・広報室
発行人/八嶋康博 編集人/横山実果
〒530-8270 大阪市北区中之島3丁目6番16号 電話06-7501-0240
企画/編集●株式会社エム・シー・アンド・ピー

本誌は大豆油インクを使用しています。 PRINTED WITH SOYINK